

# 聖徒の道

6  
1995

ゴードン・B・ヒンクリー  
大管長特別記事



# ゴードン・B・ヒンクレー 大管長

## 信念と勇気の人

十二使徒定員会会員  
ジェフリー・R・ホランド

**美**しく飾られたジョセフ・スミス記念館のロビーには、予言者ジョセフ・スミスの雄々しくりっぱな像が置かれています。その前に立ち、ゴードン・ビトナー・ヒンクレーは末日聖徒イエス・キリスト教会の第15代大管長として1995年3月13日、公式に報道関係者らに紹介されました。この記者会見では広範囲にわたるさまざまな質問が投げかけられました。しばしばウイットを織り交ぜながら、終始明るく穏やかな態度で返答がなされました。会見の終わり近く、ある記者がヒンクレー大管長に次のように尋ねました。「今後どのような事柄に焦点を当てていかれるのでしょうか。教会管理上の目標をお聞かせください。」

ヒンクレー大管長は即座にこう答えました。「『続け、励め、進め』です。私たち大管長会の目指すところは、前任者たちが築いてきた偉大なみ業を押し進めることです。」

この簡潔な返答、すなわち歯切れがよく、明快で、前もって用意したわけでもない、靈感に満ちた回答は、新しい予言者、聖見者、啓示を受ける者で

ある人物について多くを物語っています。この「続け、励め、進め」という言葉は、ルース・メイ・フォックスが65年ほど前に書いた賛美歌の歌詞から引用した、教会員にはなじみ深い言葉です。この賛美歌には喜びと決意に満ちた言葉が繰り返し用いられ、冒頭の歌詞「山のごとく強く」は題名にもなっています。そして雄々しい宣言が続きます。「われら立つは父が沃土となせし巖いわお 生ける神を信ずる名誉と徳の岩……続け、励め、進めよ。」(賛美歌167番)

神の予言者の資質を強調し、その能力を明らかにする目的で、多くの聖句や教えと同様にさまざまな賛美歌が引用されます。しかしそそらく、このはっきりとして前向きな「続け、励め、進め」という呼びかけ以上にゴードン・B・ヒンクレー大管長の本質をよくとらえた賛美歌はないでしょう。

何よりこの賛美歌には若々しい雰囲気があります。それは若人に向けて書かれていて、若人が歌うときにとりわけ靈を鼓舞します。そしてゴードン・B・ヒンクレー大管長は、彼を知り、



上——若きアロン神権者のころのゴードン・B・ヒンクレー大管長。

右ページ——教会の第15代大管長となったヒンクレー長老は、彼に先立つ古代と現代の予言者から受け継いだ遺産、すなわち神への献身と同胞への愛をもってみ業を推し進めている。

EXCEPT AS NOTED, ALL PHOTOGRAPHS ARE COURTESY OF THE HINCKLEY FAMILY AND THE CHURCH HISTORICAL DEPARTMENT.



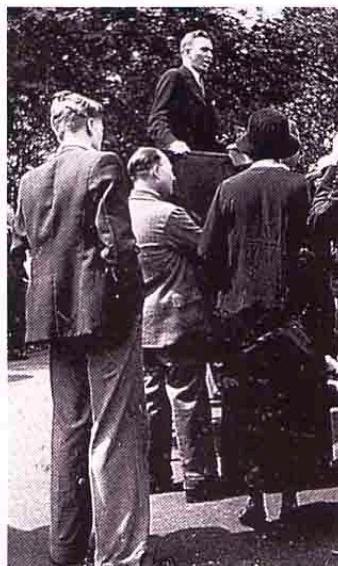
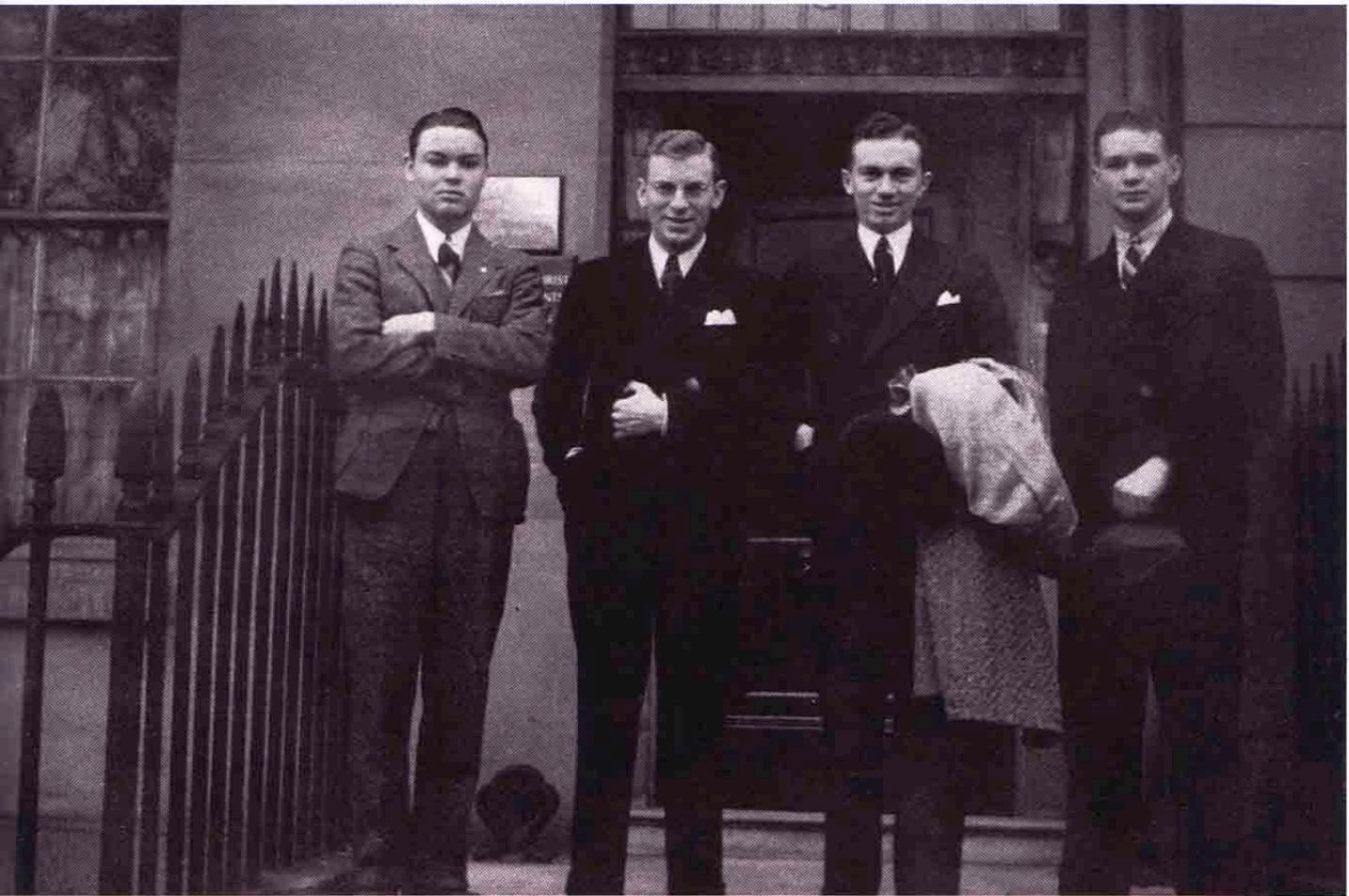
交わりのある人のだれもが言うように、84歳の男性としてはほかのだれよりも若々しい人なのです。きびきびした軽い足取り、何ものにもとらわれない快活な精神、困難で骨の折れる仕事を次々と片付けていく意欲、これらは彼の半分の年齢の人でもかなわないでしょう。このように外見も振る舞いも若々しいゴードン・B・ヒンクレー大管長は、可能性と約束に満ちた若人をとても愛しています。

「私たちは教会の若人に特に誇りを

感じています。」ヒンクレー大管長は前述の簡潔な記者会見の席で、言葉を選んでこう述べました。「現在のように力に満ちた若い男性、若い女性の世代はかつてなかったように思います。……彼らは知的にも靈的にも力を蓄え、建設的な生活を築いています。私たちはこのみ業の将来に対して、何の恐れも不安も抱いていません。」(「エンサイン」1995年4月号、p. 5) ヒンクレー大管長が若人を愛するのは、自分自身が若人と同じ心を持っていて、

下——1920年代、ブライアント・S・ヒンクレー、エイダ・ビトナー・ヒンクレー夫妻が子供たちをキャンプ旅行に連れて行った時の写真。後列左から2番目がゴードン。右ページ——宣教師時代のゴードン・B・ヒンクレー長老。(右から2番目) 大恐慌の時代にイギリスで伝道した。右ページ、下——ロンドンのハイドパークにて。若い宣教師ヒンクレー長老は、力強い話し手として人々の注目を集めた。





「このみ業の将来に対して」何の恐れも抱いていないからです。

先ごろヒンクレー大管長は、イリノイ州ノーヴーで行なわれた有名な「ニューヨーク・タイムズ」からのインタビューにこう答えていました。「至る所で善良な人々をたくさん見かけます。彼らはすばらしい特質をたくさん備えているのです。ですから、世界はよい状態にあり、すばらしいことが起きていると言えます。現在は、歴史上最も卓越した時代なのです。」

ヒンクレー大管長の内からあふれ出るような楽天的な考え方は、一体どこから来ているのでしょうか。それは、教会の先人たちに「続け、励め、進め」という意欲を与えた同じ信仰の基から来ています。「ニューヨーク・タイムズ」に掲載されたヒンクレー大管

長とのインタビュー記事を通じて、人々は末日聖徒の歴史について学べるだけでなく、信仰の真の意義についても深遠な洞察を得たことでしょう。

ヒンクレー大管長はこう主張しています。「確かに惨事は私たちを取り巻き、問題は至る所に見受けられます。しかし、ノーヴーの市をご覧になってください。聖徒たちがこの地に7年かけて築き、残していくものを見てください。……その後彼らはどうしたでしょうか。屈服し死んでいったでしょうか。そうではありません。彼らは働き続けました。アメリカ大陸の半分の距離を移動し、砂漠の地をばらの花咲く地へと変えていったのです。このような土台の上に、当教会は世界に広がる偉大な組織へと成長し、140を超える国の人々の生活にすばらしい影響を



左—20年余りにわたって、ゴードン・B・ヒンクレーは、教会のラジオ広告および伝道文献委員会のディレクターおよび書記として働いた。右ページ—1950年代中ごろ、ヒンクレー大管長（右端）は第一副ステーキ部長を務めた。デビッド・O・マッケイ大管長（中央）の姿も見える。マッケイ大管長は、アロン神権の若人に話すため同ステーキ部を訪問中であった。

下—ヒンクレー大管長が伝道から帰って間もないころ。家族が所有するイーストミルクリークの農場で。

及ぼしているのです。悲観的、批判的な態度からは何も築けません。楽観的な態度で物事をとらえ、信仰を持って取り組むとき、すばらしいことが起きます。」

「ニューヨーク・タイムズ」の記者がどれくらい理解したかはわかりませんが、彼はインタビューを通じて、ゴードン・B・ヒンクレー大管長の人柄に触れたことでしょう。すなわち明るく、聰明で、礼儀正しく、自信に満ち、人の心を鼓舞する大管長の特質です。ヒンクレー大管長は常に神に対する信仰と将来に対する確信に満ちています。

「万事うまくいきます。」これは、ヒンクレー大管長が家族や友人、同僚たちに確信を持って繰り返し語る言葉です。そして、こう言うのです。「努力を継けましょう。信じましょう。元気を出してください。くよくよしないでください。万事うまくいきますよ。」

トマス・S・モンソン副管長とヒンクレー大管長の友情は、ふたりが教会幹部に召されるはるか前、45年以上も昔から尽きることなく続いている。モンソン副管長の言葉です。「ヒンクレー大管長は鋭いビジョンと、非常に

優れた職務遂行能力、そして主イエス・キリストへの変わらぬ信仰の持ち主です。また、客観的に物事をとらえる明晰な頭脳と非常にやさしい心を兼ね備えています。教会はもとより、全世界が、彼の卓越した指導力から祝福を受けるでしょう。」

新しい第二副管長であり、ヒンクレー大管長とは40年来の友人であるジェームズ・E・ファウスト副管長は、ふたりが若き副ステーキ部長として、隣接するステーキ部のステーキ部長会で働いていた時に初めて出会いました。彼はヒンクレー大管長についてこう述べています。「ヒンクレー大管長は大変有能で、知性に富み、非常に広範囲にわたって経験を積んだ方です。そのため時折、彼に対しておそれ多いように感じてしまう人もいるようですが、彼は実にやさしく思いやり深い方でもあるのです。」

しかし、今でこそ力と自信に満ちたヒンクレー大管長ですが、1910年6月23日にソルトレーキシティーでブライアント・S・ヒンクレー、エイダ・ビトナー・ヒンクレー夫妻の長男として誕生した当初は、外見的にそれほど頼もしい印象はありませんでした。ゴー





ドンは子供のころから病弱でひ弱でした。2歳の時には百日ぜきにかかり、その影響は肺だけでなく全身に及び、この幼い子供の生命まで脅かしました。この病気は深刻なせんそくとアレルギーの持病をもたらし、それらが苦しむ少年の健康をむしばんでいました。「この子にはもっと新鮮な空気と日の光が必要です。」心配する両親に医者が告げました。それを聞いて両親はすぐにソルトレークシティのイーストミルクリーク地区に小さな農場を購入することにしました。そしてソルトレークシティーの繁華街から「田舎へ」やって来たその日から、「幼いゴードンへの医者の言い付け」を文字どおりしっかりと守りました。

ゴードンは夏の間と週末、休日をその農場で過ごすうち次第に健康になり、

働くことを学んでいました。こうして土と自然に親しみながらそこで生活し、神の大いなる全能のみ手に対する彼の信仰は、彼が植え、育て、収穫した数多くの果物の木や野菜の種のように、はぐくまれていきました。

「楽しく一生懸命働いて一日を過ごした後、弟のシャームと私は、農場の古い荷馬車に備え付けられたベッドに入り、星の下で眠りました。」ヒンクレー大管長は懐かしそうにほほえみながら当時の思い出を語ります。「よく澄み渡った夏の夜には、私たちはその古い荷馬車のベッドに寝転がって、満天の星を見上げました。我が家の中には書庫から自由に取り出せるようになっていた百科事典には数々の星座や星々が図示されていて、ふたりで星空と見比べたものです。星空でいろいろな星座を

見つけましたが、いちばん好きだったのは北極星でした。昔から子供たちがしてきたように、私たちも毎晩、北斗七星を探してはひしゃく形の柄の部分を下ってカップの縁の延長方向に目をやり、北極星を見つけたものです。

そこでわかったことは、北極星が決して位置を変えないことです。地球の自転のためにほかの星は時間を持って動くのですが、北極星は地軸と一致して同じ位置にとどまっています。子供のころこのように考えた経験から、私は北極星に対して特別な思いを抱くようになりました。北極星は、すべてが変化する中でも不变であり、絶えず動き続けてとどまるることを知らない空にあって、常に頼りにできる錨のような存在なのです。」

ヒンクレー家の息子のリチャードは



左ページ——1955年、ゴードン・B・ヒンクレー、マージョリー・ヒンクレー夫妻はスイス神殿の献堂式に出席した。大管長会の一員として、彼は1992年に同神殿を再奉獻している。右——ヒンクレー夫妻、5人の子供たちとともに。1958年4月に十二使徒補助に召されたばかりのころ。下——その3年後の1961年10月5日、彼は51歳で使徒に召された。どのような責任も堅実に、たゆまず果たしていくヒンクレー長老は、彼を知る人々にとって常に「堅固な岩」であり、導く星である。



子供のころのことをこう語っています。「父は幼い時分から、堅固で不動のものや信頼の置けるものについて特別な気持ちを抱き始めました。そのような思いは父の優れた特質としてずっと存在してきました。人々に対してもそのよう気持ちを常に持っていたのではないか。」

そのような恒久性は、子供のころのイーストミルクリークでの労働の日々よりもはるかに遠く奥深い過去から受け継いだものに起因しています。ヒンクレー大管長の祖父アイラ・ナサニエル・ヒンクレーは、7歳の時に福音を知りましたが、わずか9歳で孤児となりました。後に彼はノーヴァーに移り住み、さらにアメリカの大平原を越えてソルトレーク渓谷まで行きましたが、途中で若く美しい妻を亡くし、葬らなければなりませんでした。何年か後、アイラは再婚し、家を建て、家族を持ち、仕事に就きました。そしてブリガム・ヤング大管長から召しを受け、ユタ州南部ミラード郡のコーブクリークにある教会の牧場を管理しました。ブリガム・ヤング大管長はこう話しています。「〔この牧場は〕ほかの居住地からかなり離れているため、良識ある判

断と経験を兼ね備えた人物に任せる必要があります。もしこの任務を引き受けてくださるなら来週の月曜日から着任していただきたいと思います。(署名)福音の友、ブリガム・ヤング」

アイラのりっぱな孫はこう言っています。「祖父たちは行くように依頼された地に行き、行なうように依頼された事柄を行ないました。それが快適さや金銭あるいは生活そのものといった面でどれだけ犠牲を伴おうとです。」ヒンクレー夫妻の娘バージニアはこう言い添えてくれました。「父のことをほんとうに理解するためには、父の先祖と、彼らが父の人生と価値観に及ぼした影響力について理解する必要があります。その影響は父がこれまで行なったすべてのこととに現われています。まさに父の人生を織り成す糸と言えるでしょう。父の人生にあって、常に靈感とやり抜く意志をもたらしてきたのです。父はいつも感謝の念を表わそうと努めてきました。」

アイラは歴史的に有名なコーブフォートの町をミラード郡の中心に築き、できたばかりのシオンのステーキ部を管理し、ヒンクレー大管長の父親ブライアント・S・ヒンクレーをはじ



左——1960年代、ヒンクレー長老はアジアの教会を管理した。日本人の家族とともに。

右ページ、左——ヒンクレー長老の著わした教会歴史入門書「回復された真理」を読むジョセフ・フィールディング・スミス大管長。

右ページ、右——1972年4月、アリゾナ州の聖職者と会見するゴードン・B・ヒンクレー長老とトマス・S・モンソン長老。当時はふたりとも十二使徒定員会に属していた。

めとする子供たちを育てる環境を整えていきました。

ヒンクレー大管長の弟で、現在コープフォート伝道部のディレクターを務めるシャーマン・ヒンクレー兄弟は、西部の荒野での苦難の時代から継承した遺産についてこう述べています。「昔の面影をとどめつつも、最近再建されたこの町は、セメントに火山岩を混ぜたもので作られており、壁は1メートル余りの厚い土台の上に築かれています。」さらに彼はヒンクレー大管長について触れ、こう言っています。「この町のように兄もしっかりした人です。器の大きな人です。たゆましく堅固な信仰生活を送ってきました。兄は祖父や父に似ています。同じタイプの人間だったのです。ある意味で兄は、コープフォートの町にもよく似ています。彼はまさに堅固な岩です。」

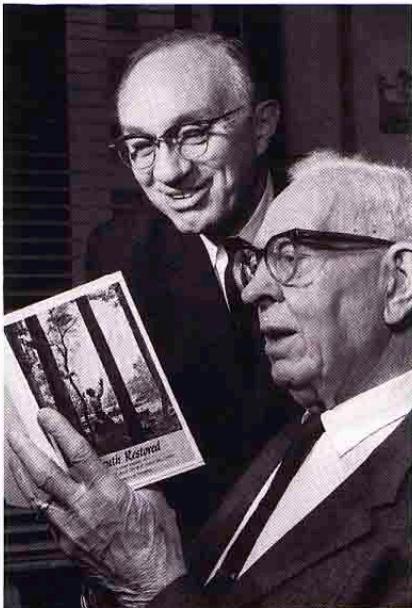
これにはヒンクレー大管長を知るだれもがうなずくことでしょう。教育界、政界、実業界の傑出した指導者である、ロドニー・H・ブレイディー兄弟は「ボネビル・インターナショナル」(教会経営の放送会社)の会長であるゴードン・B・ヒンクレー大管長の指示を受けながら、過去10年間にわたり、同会

社の社長および取締役として働いてきました。彼はヒンクレー大管長についてこう語っています。「現在の職に就いてから、私は文字どおり何百時間もヒンクレー大管長とともに過ごしてきました。これまで彼ほど公平な態度で物事を検討し、きっぱりと決断を下す人を見たことがありません。結論を出さねばならない時が来ると、過去に交わした約束をしっかりと踏まえたうえで決断を下します。彼ほど高潔な人物にも会ったことがありません。」

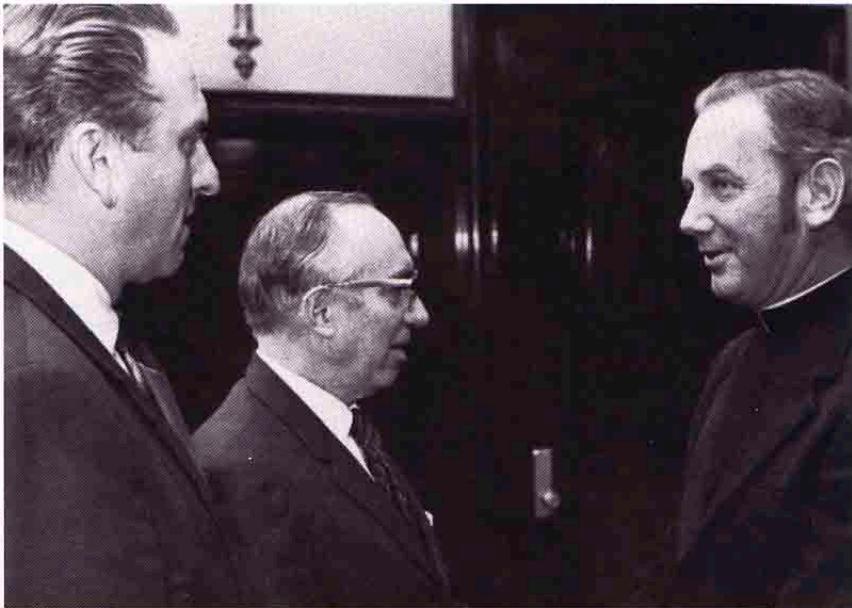
この言葉はドイツ北伝道部の元伝道部長、スタンレー・D・リース兄弟による人物評とも一致しています。彼は後にスイス神殿の神殿長を務めた人で、ヒンクレー大管長とは旧知の間柄です。「ゴードン・B・ヒンクレー大管長と知り合って59年になります。」リース兄弟はほほえみながらこう話してくれました。「私は彼の家の近所で育ったんです。お父さんのブライアント・ヒンクレー兄弟が私のステーキ部長でした。私の知っているかぎり、彼が現在の召しに似つかわしくない行動を取ったり、いかなる形にせよ不適切なことを言ったりしたことはありませんでした。私は彼を全面的に信頼しています。」

コープフォートの堅固な岩や北極星にたとえられ、そして山のごとく強いヒンクレー大管長の高潔な人格は、彼が学び身につけたところによるだけではなく、彼が家族から受け継いだものにも起因しています。父親のブライアント・S・ヒンクレーと母親のエイダ・ピトナー・ヒンクレーはともに教育者で、当時としては一流の訓練を受けていました。加えて、ヒンクレー姉妹は音楽家、ヒンクレー兄弟は熟練した歴史著述家でもありました。ヒンクレー大管長が子供のころ、彼らの質素な家には魅力的な書庫があり、そばには大きなかしの木のテーブルとすてきなランプ、そしていくつかの座り心地のよい椅子が置かれていました。高い教養を身につけた両親が集めた蔵書は1,000冊を超えていました。ヒンクレー大管長の息子クラークは、父がよく子供たちにその書庫がどんなに静かで魅力的な場所だったか話して聞かせてくれた、と言っています。

「確かにそこはすばらしい勉強の場でした」と、クラークは続けます。「書庫のおかげで良書に親しみ、家で学習するのが大好きになったようです。」そしてほほえみながらこう付け



PHOTOGRAPH COURTESY OF DESERET NEWS



加えました。「子供のころの父が毎日読書に明け暮れていたとは思いませんが、父が偉大な文学に感化され、大きな影響を受けたのは間違いません。父はその部屋に漂っていた雰囲気について何度も話してくれました。読書意欲をかき立てるその雰囲気を今でもよく覚えているとのことです。」

ヒンクレー大管長は言葉と文学に対する愛着を適切にはぐくみながら成長していました。若いころの学問への関心はジャーナリズムの分野に向かれました。そして、ジャーナリストを目指してユタ大学に通いました。ヒンクレー大管長は昔を思い出し、こう言います。「思いがけぬ成り行きから最初に受講したクラスが、とてもよかつたのです。大学1年生向けの英米文学関係のクラスに登録しに行ったのですが、どのクラスも定員に達していました。しかし、まだ登録しようとしている学生が何人もいたので、学校側は新しいクラスを開講せざるを得ませんでした。しかもそのクラスを教えられるのは、有能で多才な学部長しか残っていなかったのです。私は、その教授から英米文学への優れた手ほどきを受けました。私は彼とその授業が大好きで

した。カーライルやエマーソン、ミルトン、ロングフェロー、シェークスピアなど片っ端から読んだものです。やがて私は、ラテン文学やギリシャ文学の研究に進みました。今はもう無理ですが、かつてはイーリアスやオデッセーをギリシャ語の原本で読むことができました。こうして大学での研究は、ほとんど使われなくなった古代言語で明け暮れたのです。」

ヒンクレー大管長と接した人は、必ずと言っていいほど彼の美しい言葉遣いに感銘を受けます。知性の幅や奥行きが言葉に現われるからでしょう。「ヒンクレー大管長は実に優れた雄弁家です。」こう話すのは彼の宣教師時代の同僚で、60年来の友人であるウェンデル・J・アシュトン兄弟です。「数年前、海軍の指導者のトンプソン氏が息子さんにこう語ったそうです。『ヒンクレーさんは偉大な論客だよ。人の心を動かすすべを心得ている。』私はこの言葉を決して忘れないでしょう。」

大恐慌の時代で伝道に出る若者が比較的少ない時期でしたが、ジョン・C・ダンカン監督は若きヒンクレー兄弟の方に来ると、伝道について真剣に考えてみるよう勧めました。彼は父親

とそのことについて話し合いました。3年前に愛する母親を癌で亡くしたばかりでしたから、家族にとって経済面はもとより、あらゆる点で苦難の時代でした。

「それにもかかわらず、父がこう言ったのを覚えています。『おまえの必要を満たせるよう、全力を尽くすよ。』」ヒンクレー大管長は込み上げるものを感じるような面持ちで、こう述懐します。「父と兄は、伝道中の資金を工面すると約束してくれました。そんな時、母が残したわずかばかりの預金が見つかりました。食料やそのほかの買い物をした際の釣り銭をためたものでした。なげなしのそんなお金まで出してもらって私は伝道に出たのです。」

その後程なくして、母親がこつこつとためた神聖なお金を心に留めながら、彼はイギリスに向けて出発しました。

「私は名誉にかけて、それが無駄にならないように大切に使いました。」彼は感動を抑えてそう語ります。こうした犠牲や貯蓄によって培われた、金銭を大切にする態度や貧困の時代の思い出は、今日、細かい点にまで配慮の行き届いた教会の財政支出の管理に生きています。彼の執務室の棚には額に収



PHOTOGRAPH BY DELL VAN ORDEN, CHURCH NEWS

められた古代ギリシャの小さなレプトン硬貨が主要な調度として置いてあります。これは意味のないものではありません。これは実にわずかな額に当たる、あの「貧者の一灯」、つまりルカによる福音書第21章1節から4節にある「貧しいやもめのレプタ」なのです。

確かにこのイギリスでの伝道は、ヒンクレー大管長のその後の生涯のすべての働きに影響を与えるいわば原点となり、搖るがぬ土台となりました。

最初、ランカシャーのプレストン（ここはヒーバー・C・キンボールをはじめとする人々が、その約1世紀前、最初にヨーロッパ伝道部を組織した場所でした）に派遣されたヒンクレー長老は、新しい土地で見慣れない環境の中に置かれた宣教師のだれもが経験するいくつかの気のめいる事柄を経験しました。体調が優れず、イギリス北部のその貧しい工業都市で最初の街頭伝道に出かけた時のことを、彼はこう述懐します。「私はおびえていました。小さな説教台の上に立って、集まった群衆に目を向けました。当時は大恐慌の最悪の時期で、人々はひどく貧しい状況にありました。挑むような荒々し

い態度に見えたものです。私はどうした訳か、伝えたいことをうまく言葉にできず、詰まりながら話を終えました。」

伝道活動をはかばかしく進められず、落胆したゴードンは、父親に手紙をこう書き送りました。「ぼくは自分の時間や家族が送ってくれたお金を無駄にしています。ここにいても意味がないように思えます。」やがて父親から愛情のこもった、しかし簡潔な手紙が届きます。「愛するゴードンへ。過日、おまえの手紙を読みました。私にできる忠告はただひとつ。自分を忘れてみ業に励みなさい。愛を込めて、おまえの父より。」

この時のこと、ヒンクレー大管長は次のように語ります。「私は父の返事をよくよく考えました。そして次の日の午前に、聖典学習のクラスで主の偉大な次の言葉を読みました。『自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。』（マルコ8：35）

この簡潔な言葉、約束が私の心を打ちました。私はひざまずいて、自分自身を忘れ、み業に励むように努力することを主に誓約しました。今にして思え

左——ニューヨーク州フェイヤットで1980年4月に行なわれた、教会設立150年祭の場でスペンサー・W・キンボール大管長の肩に腕を回すヒンクレー副管長。傍らで見守っているのは七十人のヒュー・W・ピノック長老。

右ページ——キンボール大管長の副管長として、ヒンクレー長老は大管長会のほかの3人が病気の時、しばしば大管長会の業務を遂行した。写真は、1983年4月の総大会で沈思黙考するヒンクレー副管長。「万事うまくいきます。」これは、ヒンクレー大管長が人々に確信を持って繰り返し語る言葉である。そして、こう励ますのである。「努力を続けましょう。信じましょう。元気を出してください。くよくよしないでください。万事うまくいきますよ。」





PHOTOGRAPH COURTESY CHURCH NEWS

左——1982年、ヒンクレー長老は十二使徒定員会のトマス・S・モンソン長老を伴い、アメリカ合衆国大統領ロナルド・レーガン氏を、ユタ州オグデンにあるオグデン地区福祉活動センターに案内した。右ページ——ヒンクレー夫妻。1983年にヒンクレー長老が献堂したメキシコシティー神殿の前で。下——イエローストーン国立公園は1988年の火災で荒廃。ヒンクレー夫妻は若木が灰の中から育っているのを見つけた。ヒンクレーダ管長は木を植えるのが好きである。これまで植えた樹木は長年間に何百本にもなった。

ばこれが私の人生の岐路でした。以来私が経験したすばらしい出来事は、さかのぼって考えると、すべてこの時に下した決断のおかげなのです。」

若きヒンクレー長老は、ランカシャーでのみ業に打ち込むようになるとすぐに、当時十二使徒評議員会の一員であり、ヨーロッパ伝道部の伝道部長であったジョセフ・F・メリル長老の特別補佐としてロンドンに来るよう要請する手紙を受け取りました。

「当時のロンドンで、私たちはあまり多くの改宗者を得られませんでした。」同僚の専任宣教師であったウェンデル・J・アシュトン兄弟はそう述懐します。「しかしヒンクレー長老は、ハイドパーク（訳注——ロンドンの公園。自由な公開演説・討論の場として有名）の一角で開いた街頭集会で右に出る者がないほど優れた説教者でした。私たちはここで当意即妙の話術を身につけたのです。宣教師仲間の間ではヒンクレー長老がいちばんたけていました。いつも思ってきたことですが、彼がその後の人生でいっぱいに教会を擁護し、真理を大胆に宣言できたのも、ロンドンのあのハイドパークでかなりの実地訓練を積んだおかげですよ。当時

も弁舌にたけていましたが、今もそうです。」

やがて、まだ若いヒンクレー長老は、疲れ果て、体重も減り（その後の生涯で彼を待っていた事柄を考えると、これは大きな皮肉でしたが）「もう決してどこにも旅行したくはない」という気持ちでソルトレークシティーに戻つて来ました。そして、ヨーロッパ伝道部が抱える特別な問題に関して、伝道部長があらかじめ取り次いであつた大管長会との約束を守るために、教会執務ビルへ行き、ヒーパー・J・グラント大管長とふたりの副管長、J・ルーベン・クラーク・ジュニア長老ならびにデビッド・O・マッケイ長老に会いました。「グラント大管長は、私との面会時間は15分の予定だとおっしゃいましたが、実際に私が部屋を出たのは1時間15分後でした。その数日後、マッケイ副管長から電話があり、教会で新設されたラジオ広告および伝道文献委員会の書記として働く要請を受けたのです。」

第二次大戦下でのわずか2年間の空白を除けば、これが教会本部で職員として、また教会幹部として務めた60年に及ぶ経歴の始まりになりました。



PHOTOGRAPH BY GERRY AVANT, CHURCH NEWS



「ヒンクレー大管長の教会での並々ならぬ豊かな管理上の経験によって、教会歴史と本人の記憶はみごとにひとつとなっています。」十二使徒定員会の長年の同僚であるニール・A・マックスウェル長老はそう語ります。「ヒンクレー大管長の『過去にありしまま』

と『現在あるがまま』の事柄に対する知識は、『未来にあるがまま』の事柄に貢献する備えとなっています。」若い宣教師が大管長会に初めて印象的な報告をしたあの教会執務ビルは、ちょうど60年後に教会の大管長として本人がそこを管理するようになった現在も、

90歳の誕生日に副管長とその伴侣から祝福を受けるエズラ・タフト・ベンソン大管長。（左から）フランシス・モンソン姉妹、トマス・S・モンソン長老、ゴードン・B・ヒンクレー長老、マージョリー・ヒンクレー姉妹、ベンソン大管長、フローラ・ベンソン姉妹。

COURTESY OF DESERET NEWS



同じ姿を保っています。

若きゴードン・B・ヒンクレーは、教会職員として一緒に仕事をするようになつたおおぜいの教会指導者のためには有為な働きをし、彼らに深い印象を残しました。すべての指導者が彼の聰明さ、飲み込みの早さ、勤勉さに気づきました。しかしだれよりも身近に接し、長年にわたって大きな影響を彼に与えたのは、スチーブン・L・リチャーズ長老でしょう。

ヒンクレー大管長が最初に教会本部で働き始めた時、当時十二使徒定員会の一員であり、彼が書記の責任を務めたラジオ廣告および伝道文献委員会の委員長を務めていたのが、スチーブン・L・リチャーズ長老でした。後年、リチャーズ長老が教会の大管長会でデビッド・O・マッケイ大管長の第一副管長になると、ゴードンはリチャーズ副管長が委員長を務める同伝道委員会の幹部書記として、彼の傍らにとどまりました。

「スチーブン・L・リチャーズ長老は私の人生にたくさんのよい影響を与えてくれました。」ヒンクレー大管長は愛情を込めてそう語ります。「リチャーズ長老は堅固な精神とやさしさを兼ね備えた人で、私には特に親切にしてくれました。」

明らかにリチャーズ副管長の方でも同じような気持ちを抱いていたことが、1953年12月22日付けの手紙からうかがえます。

「親愛なるゴードン。この楽しいクリスマスの時節にあなたとご家族のうえに幸福が注がれるように心から願っています。あなたと一緒に働き、助けが受けられることに私がどれだけ感謝

しているか言葉では言い尽くせません。あなたが喜んで果たしてくれる効果的な働きなしで、私がどれだけ自分の責任を果たせるものでしょう。それに対する主の祝福があなたにあることを私は確信しています。あなたは主の聖なるみ業の偉大な貢献者だからです。感謝を込め、忠実なあなたの兄弟、友人である（署名）スチーブン・L・リチャーズ。」

ヒンクレー大管長は生涯にわたって、その働きを支えている注目すべき精神的資質や判断力を示してきました。「しかしながらと言っても、ヒンクレー大管長が示した全生涯を通じて最良の判断は、マージョリー・ペイ姉妹との結婚ですね。」十二使徒定員会会长代理であるボイド・K・パッカー長老はこう語ります。「ペイ姉妹を知らずして、ヒンクレー大管長を語ることはできません。彼女はヒンクレー大管長と彼らの子供たちの生活の中にあって、愛情を示し、方向を示し、忍耐に満ちた影響力のある存在です。」

「マージョリーは、一緒に育った幼いころから、まるで隣の家のやさしい女の子とでもいった存在でした。」ヒンクレー大管長の妹であるラモーナ・H・サリバン姉妹はそう述懐しています。「実際、彼女は通りを挟んだ向かいに住んでいましたけどね。とても愛らしい女の子でした。私たちが通っていた昔の第1ワード部では集会や活動で朗読や演技の発表がありました。当時のマージョリーのことでの私がいちばんよく覚えているのは、発表の場で見る彼女が、まだ幼いにもかかわらず洗練された印象的な女の子だったということです。ほかの子供たちは、言って

みれば、立ち上がって何か口をもぐもぐさせていただけだったのに、マージョリーは紛れもないプロ並みの語り口でした。巧みな話術や身のこなしを心得ていたんです。彼女の朗読は今でも覚えています。」

ふたりが真剣にデートをするようになったのは彼が伝道から帰ってからでしたが、最初に彼の心をとらえたのはマージョリー・ペイ姉妹のそうしたはつらつとした朗読のひとつでした。「私が最初に彼女を見たのは初等協会でした。」ヒンクレー大管長は笑いながらそう言います。「彼女は朗読をしていました。それが私をどんな気持ちにさせたかは忘れてしまいましたが、あの朗読だけは決して忘れません。そして彼女はとても美しい若い女性に成長しました。そして私には、彼女のような人と結婚するという良識が備わっていました。」

ヒンクレー夫妻は1937年4月29日に結婚し、3人の娘とふたりの息子、つまりキャスリーン・H・バーンズ、リチャード・ゴードン、バージニア・H・ピアス、クラーク・ブライアント、ジェーン・H・ダッドレーの親になりました。強いきずなで結ばれたこの家族には、さらに25人の孫と13人のひ孫がいます。

「夫はいつも模範によって教えてくれます」と、ヒンクレー姉妹は手放しで称賛します。「結婚生活を通じて私は夫が子供たちに小言を言っている姿を見たことがありません。子供たちは父親から何を期待されているか理解しています。父親の姿を見ていてますから。」

ヒンクレー姉妹はさらにこう語りま



公衆の前に姿を見せることの多いヒンクレー夫妻だが、子供や孫たちとの間に強いきずなを保っている。左——家族の結婚披露宴の前に、孫のネクタイを直すヒンクレー長老。右ページ——3人の孫を抱いて。下——家族の「ヘッド・チアリーダー」と娘のひとりから呼ばれているヒンクレー姉妹。ピアノの演奏を楽しんでいる。

す。「その点では、夫はどの子にとっても常によい模範でした。私が夫について知る限り、彼が使徒としてふさわしくないことを言ったり行なったりしたのを見たことがありません。でも、誤解しないでくださいね。」ヒンクレー姉妹は笑みを浮かべます。「夫は決して信心家ぶっているわけではないんです。ユーモアのセンスもとつてあります。ただ、どんなことがあっても決して道を踏み外さない人なんです。すばらしい人ですわ。」

ヒンクレー大管長とその子供たちが、ヒンクレー姉妹を称賛するのもうなづけます。「母は偽りのない人です。」長女のキャスリーンはそう語ります。「彼女は完全な清さを身につけた、あらゆる人の友です。どんな人にも称賛を惜しません。牛乳配達の人や郵便屋さん、ごみの収集業者はもとより、すべての人に対してそうなんです。」

三女のジェーンは家族を支え、励ましを与えてくれる人として母親を記憶しています。「母は子供たちのしていることや関心のあることはみんな知っていました。今は同様のことを孫全員について知っています。母は子供たちと一緒に家にいるのが大好きで、夏休

みをいつも心待ちにしていました。ほかの親は秋になって学校がまた始まる喜んでいるのに、母は違います。泣くんです。自分を置いて行ってしまう悲しんだものです。」

息子のリチャードは、心の底から笑いながら、小学校時代の思い出を語ってくれました。何かの罰で、放課後に学校に残された時のことです。毎日子供たちが学校から帰って来るのを心待ちにしているヒンクレー姉妹は、帰って来た子供たちの中に息子の姿が見えず、ひどく寂しさを覚えました。彼女がその次にしたことは有名になっています。この母親はどこからともなく、悔いる子供の教室に姿を現わし、目を丸くした教師に向かってこう言ったのです。「一日じゅうこの子に何をしてもけっこうですわ。でも、3時以降は私がこの子の面倒を見ます。」

ヒンクレー大管長は世界じゅうを巡る主要な旅の多くに夫人を同行することができました。旅の後でヒンクレー姉妹はいつも子供たちにその話を語って聞かせます。「母はいつも魅力ある手紙を旅先から書いてくれました」と述懐するのはキャシーです。「そして家に帰ると家族全員に詳しく旅の様子



PHOTOGRAPH BY ELDON K. LINSCHOTEN





左ページ——伝統的なマオリ族の衣装に身を包んだ子供たちとポーズをとるヒンクレー夫妻。1989年11月にニュージーランドを訪れた時の写真。右——1990年にサモアのトフィラウ・E・アレサンナ首相から武典用ボウルを贈られるヒンクレー長老。同僚のひとりはヒンクレー大管長についてこう語る。「福音を説き、聖徒たちを祝福し、高め、死者の贖いを促進するというただひとつの目的のために、世界じゅうをこれほど遠くまで、これほどたくさんの場所へ旅行した人は、教会歴史を通じていませんでした。」



PHOTOGRAPH BY PEGGY JELLINGHAUSEN

話をしてくれました。目にした光景、耳にした音、忘れられない経験など、それこそすべて話してくれました。まるでひとつの物語のようでした。

たとえば、韓国のソウル神殿の献堂式にまつわる話を、母が楽しくありありと話してくれたのを私は覚えていました。その体験談の中には、韓国のお姉妹たちが着ていた民族衣装や服の話もありました。父と母が公式訪問の人々と一緒に神殿を出た時に、母はそれらを観察していました。母はことごとくを詳細に記憶していて、熱を込め、目をいきいきさせて経験したすべてを、特に女性たちの美しい衣装や外見を説明してくれました。そのうっとりするような話の最中に、父は顔を上げてこう言っています。『民族衣装？ 何のことだい？』ここが父と母の違うところですね。』

長年にわたる奉仕と旅の歳月の間に、ヒンクレー大管長にはさまざまな国の聖徒たちを祝福するたくさんの機会がありました。文字どおり彼らの頭に手を置いて祝福する機会もありました。

1972年9月、教会の大管長に聖任されたばかりのハロルド・B・リー長老は、当時十二使徒定員会会員であった

ヒンクレー長老に、ヨーロッパおよび中近東への歴史的な訪問に同行するよう要請しました。これは、約2,000年ぶりに教会の長が聖地を訪れる旅となりました。

「その旅行でリード管長は体調をひどく崩しました。」ヒンクレー大管長は思い出してそう語ります。「ある晩遅くリード管長から私の部屋に呼び出しがあり、リード管長を祝福してくれないかと言うんです。この旅行にはイスラエルのエドウィン・Q・キャノン伝道部長も同じ責任を受けて同行していたので、大管長の灌油の儀式に加わってもらうよう彼にも依頼しました。私たちは一緒に灌油の儀式を行ない、リード管長の健康状態を非常に心配しながら部屋に戻りました。

その後、同じ晩に、リード管長はせき込み始めました。激しくしつこいせきで、しばらくそれが続きました。ホテルの部屋が隣だったので、それが聞こえたのです。何度も何度もせき込んでいました。ついにそれがやみ、大管長が少し楽になったことを感謝しながら、私は眠りにつきました。

翌日、リード管長はそのことについて何も触れませんでした。ところがさ

らにその翌日、彼は私にこう言ったのです。『私たちが奇跡の地に来なければならなかつたのは、私たち自身の中に奇跡を見るためでした。』その後リーダ管長は、あのひどいせきの中で大きな血の固まりを吐いたことを私に言いました。それから約1年と少ししてから、彼はいわゆる胸膜塞栓症が原因で亡くなりました。』

ゴードン・B・ヒンクレー長老の生涯で最もチャレンジに満ちた瞬間のひとつは、1981年の夏、大管長会で働く副管長のひとりとしてスペンサー・W・キンポール大管長から召された時でしょう。当時、大管長会の健康状態は一人一人異なるものの皆優れませんでした。しかし大管長会は、キンポール大管長、N・エルドン・タナー副管長、マリオン・G・ロムニー副管長の3人で「完全な」働きをしていました。それにもかかわらず、明確な啓示を受け体調も優れて健康な時に、キンポール大管長はヒンクレー長老に副管長として大管長会に加わるように要請しました。それは3人目の副管長でしたが、教会歴史にその前例は豊富にありました。

「大管長会に加わるというキンポール大管長からの召しを受けた時、私はどう働けばいいのか、あるいはどう加わればいいのかはっきりとはわかりませんでした。もしかすると、当時彼らも私がどうすればいいのかわかっていないかったかもしれません」と、ヒンクレー大管長は語ります。「しかし、状況の進展とともに助けが必要になって、私は一生懸命にそれらを果たしました。私の召しが数日で終わるか、何ヵ月も続くのか、私にはわかりませんでした。」

結局のところ、以来ゴードン・B・ヒンクレー長老が教会の大管長会を離れることは一度もありませんでした。1982年にタナー副管長が死去すると、ロムニー副管長が第一副管長となり、ヒンクレー長老は第二副管長として支持を受けました。

「これは非常に重い、圧倒されるような責任でした。」ヒンクレー大管長はそう述懐します。「ときにはほとんど恐ろしいほどの重荷と感じました。よく十二使徒会の兄弟たちに助言を求めるものです。

ある特別な機会に主のみ前にひざまずき、きわめてむずかしい状況の中で助けを求めたことが思い出されます。その時、慰めに満ちた言葉が心に呼び起こされました。『汝らつしみて、わが神なることを知れ。』(教義と聖約101:16) 私はこれが神のみ業であることを再確認しました。また主はこのみ業が挫折するのを許されず、私がしなければならないことはただみ業に従事し、最善を尽くす点にあること、さらにいかなる障害や妨害があってもみ業は前進することを、改めて知りました。』

まさにヒンクレー大管長の信念のとおりです。「きっとうまくいきます。努力を続けましょう。信じましょう。元気を出してください。くよくよしないでください。万事うまくいきますよ。』

こうした一連の体験や同様の経験によって、ヒンクレー大管長は現在聖任された神聖な務めのために鍛えられてきました。「ヒンクレー大管長は何でもできますよ。」そう語るのは、ヒンクレー大管長の友人であり、引退するまではビジネス界と地域社会で指導的立場にあった、B・Z・バッド・カス

トラー兄弟です。「彼は（アメリカ合衆国）ジョージ・パットン将軍になぞらえられると思います。パットン将軍は刻々と変化する戦況に順応した戦時中の偉大な伝統主義者です。ヒンクレー大管長は、伝統を守る非常に献身的な人で、21世紀という異なった環境の中へ私たちを導いてくれる人です。」

もしかすると教会の大管長会に、これほどよく責任に対して準備を整えてきた人は、過去にいなかったかもしれません。60年間にわたる教会の管理上の責任を通じて、ヒンクレー大管長はじかに予言者たちに接し、教えを受け、ヒーバー・J・グラント大管長からハワード・W・ハンター大管長に至るまでの8人の近代の予言者一人一人に仕えてきました。彼の同僚のひとりが言うように、「福音を説き、聖徒たちを祝福し、高め、死者の贍いを促進するというただひとつの目的のために、世界じゅうをこれほど遠くまで、これほどたくさんの方へ旅行した人は、教会歴史を通じていませんでした。」

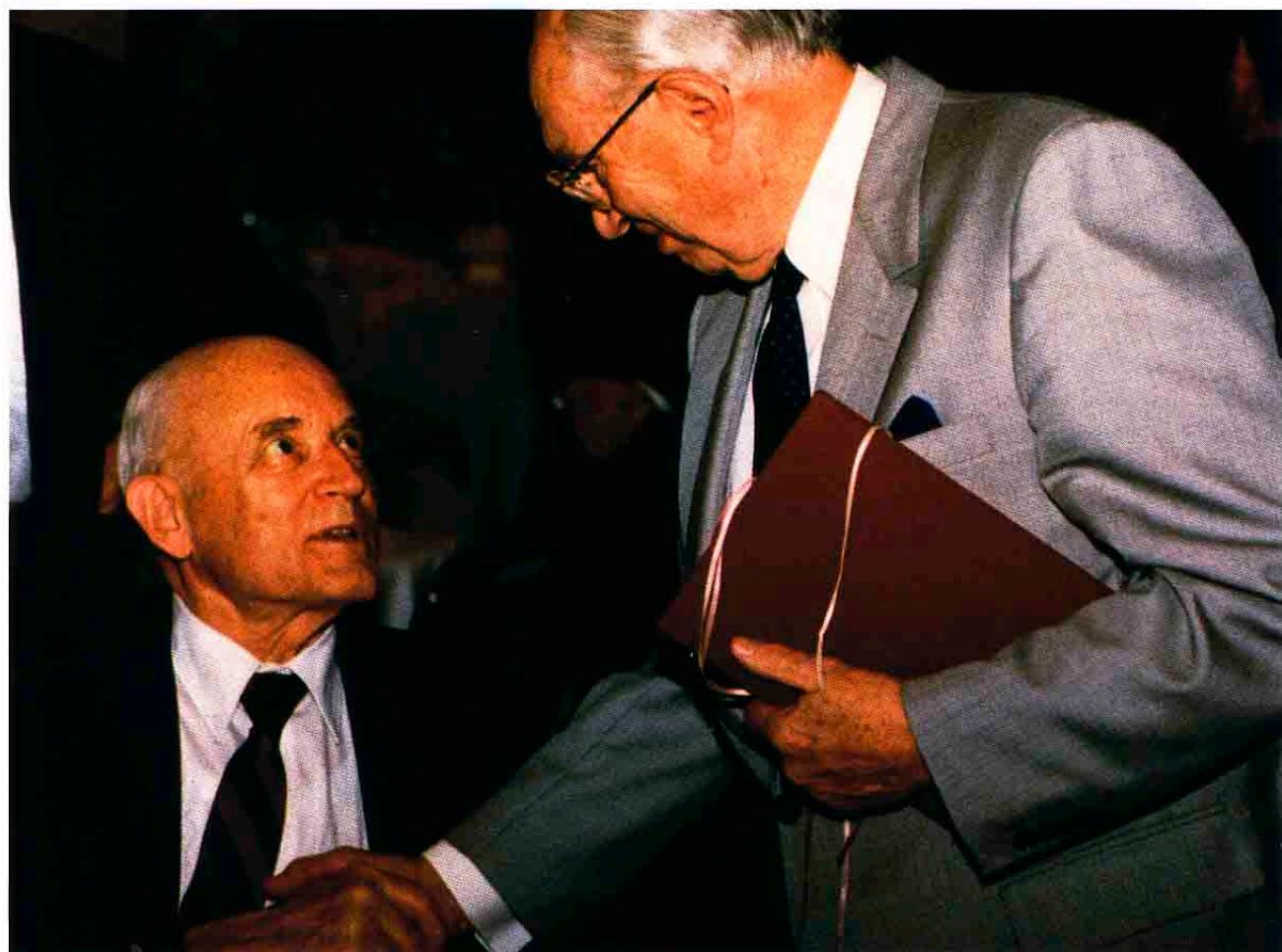
青年時代の、寒さで身の引き締まるような澄み切った夜を思い出して、ヒンクレー大管長は最近、世界じゅうの教員にこう語りました。「今では北極星を見ることはほとんどできません。都会に住む私たちは、街の明かりのために、すばらしい夜空を眺めることができないのです。しかし何世紀もの間、北極星はいつも変わらず、人々の道しるべとなっていました。」(『愛を生活的の道しるべに』『聖徒の道』1989年7月号, p.69)

同じことは、予言者、聖見者、啓示を受ける者、管理大祭司、末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長という神

ヒンクレー長老の80歳の誕生日祝いに、当時十二使徒定員会の会長であったハワード・W・ハンター長老を迎える。この5年後の1995年3月12日、ヒンクレー長老は教会の大管長に就任した。

聖な職に召され、これを引き受けたゴードン・B・ヒンクレー大管長についても言えます。彼の前にいた予言者たちと同じように、また彼らを導いたイエス・キリストの福音が確実性を備えているように、彼は定められた場所にいます。「確固として勇敢に彼は立っています。」その志操堅固な態度

と奉仕、彼の周囲に巡る山脈のように確固とした信仰は、私たちすべての者にとって錨になっています。確かに私たちにとってヒンクレー大管長を支持するためにできる最善の事柄は、「続け、励め、進め」(賛美歌167番)という呼びかけにこたえることなのです。□





PHOTOGRAPH BY TOM SMART, DESERET NEWS

**教**会の大管長になって迎える最初の総大會で、トマス・S・モンソン第一副管長、ジェームズ・E・ファウスト第二副管長とともに、十二使徒定員会会員とあいさつを交わすゴードン・B・ヒンクレー大管長。記者会見の席上、教会の運営上の強調点を尋ねられて、ヒンクレー大管長はこう語った。「『続け、励め、進め』です。私たち大管長会の目指すところは、前任者たちが築いてきた偉大なみ業を推し進めることです。」